【テーマ】　男女共同参画に関する人権

【発行月】　R3.3

女性蔑視について考える
無意識の偏見を問う機会を積み重ねること

２月３日、東京オリンピック・パラリンピック組織委員会の森会長の「女性がたくさん入っている会議は時間がかかる」との発言後、８日間で大会ボランティア辞退者が740名、抗議のネット署名も15万筆近く集まるなど、ついに会長辞任に追い込まれました。

まかりとおってきた問題

世界中が注目しているのは、森会長の辞任という表面的な変化ではなく、発言の中にある「女性」に対する偏見により、浮き彫りになった日本社会での「男女間の不平等の容認」という風潮を変えることができるかであると言われています。

これまでも、大相撲における土俵の女人禁制、複数の医科大学が入試結果を操作して女性合格者数を抑えるなど、女性差別が社会問題となってきました。

男女間の不平等については、「当たり前」や「昔から」、「みんな同じ」という考え方で容認され、まかりとおってきたことに問題があります。

無意識の中に潜む偏見

女性に対する差別や、男女間の不平等が表面化した際に、その都度問い直せるか、その努力を積み重ねることができるかが、まさに今、問われています。

私たちの地域の中でも、男性ばかりが理由なく優先されてないか、女性がわきまえることが当たり前になっていないか。無意識の中に潜む偏見について振り返りたいものです。